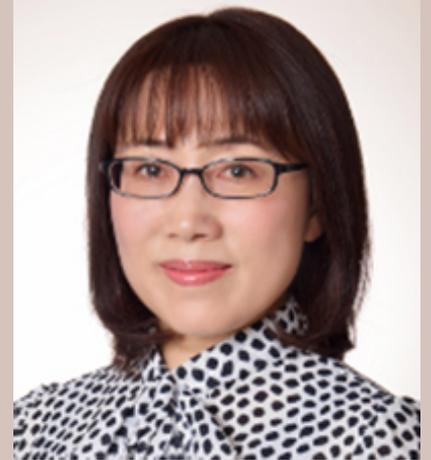


学ぶ意義と目的を明確にし、 研究の内容と手法を能動的に学ぶ

2016年度春学期ティーチングアワード受賞

対象科目：対照言語研究A

20年前に来日し中国人留学生として学んだ新田講師。自らの体験も活かし、対照言語学という領域を学ぶ意義を伝え、日本語を教える際に役立てほしいと考えている。そんな思いで行われているこの授業は、学生アンケートで「有意義であった」という項目で満点を獲得するなど、高く評価されている。



新田小雨子

日本語教育研究科非常勤講師

講義の意義と目的を 最初に周知させる

「対照言語学A」は、日本語と中国語の対照比較研究論文を読み、両言語の相違点や類似点を極め、それに基づいた日本語教育における留意点を学ぶというものだ。日本語に加え中国語の知識が必要となることもあり、受講生は2016年度前期6人、後期8人のうち、前期の1人を除く全員が中国人留学生という構成であった。

この授業で新田講師がまず理解させたいと考えているのは、言語習得や言語の教育現場における対照言語学の意義だ。そのため、15回の授業のうち初回のガイダンスと2回目の授業を使って、対照言語研究とは何か、その歴史や成果などの初歩的な知識を伝える講義を行っている。

受講生のほとんどと同じ中国語を母語とする日本語研究者として、自らの経験も活かして両言語の類似・相違する点を説明し、それ故に間違いやすい点を理解させる。さらに、それを踏まえた上で教える立場としてはどういう点に留意すべきなのかについても言及する。

「言語の比較対照を通じて、今まで気付かなかったことが認識できるようになります。それを教育現

場で活かすことができれば、より効果的な指導ができます」。

この2回の講義で対照研究という分野に対する理解を深め、この講義がどういうものなのかをハッキリと伝えることによって、受講者の認識も大きく変わってくるという。

多くの論文に触れながら、 研究手法も学ばせる

3回目以後は、毎回ひとりの学生がある論文について発表し、それについて受講者全員でディスカッションするという形で進行する。発表の際には、発表者が一気に話をするのではなく、ところどころで他の学生からの質問を受けながら進めるようにしている。発表者が自ら感じた疑問点や不明点などを提示してディスカッションにつなげることもある。

「一通り発表し終えてからだ、聞いている時間が長くなり集中力が落ちてきます。それを防ぐため

にも、一方的に聴くのではなく常にやりとりがあるよう工夫しています」。

教員も随時内容についての補足や解説なども差し挟む。「学生に知ってほしいことをタイミングよく講義に盛り込み、さらに理解が深まる議論につながる課題を与えるように心がけています」。

この授業では、論文の内容を理解するだけではなく、研究方法について学んでもらうという目的もある。

「対照研究という分野に触れたばかりなので、対照研究における研究方法に関して十分把握していない学生は少なくありません。さまざまな論文の中で実際に使われている研究手法や論文の書き方なども説明し、今後の研究に役立ててもらいたいと期待しています」。

話しやすい、 質問しやすい雰囲気づくり

授業の運営上では雰囲気づくりにも心を配っている。ほとんどが中国人留学生でありながら、発表もディスカッションもすべて日本語で行われるため、うまく表現できない学生もいる。そんなときは何が言いたいのかを察してフォローすることもある。

「教員として、学生を励ますことはとても大事だと考えています。学部では中国語の授業も行っていきますが、うまく発音できないことに教員が苛立っているのは、シャイな学生は萎縮してしまいますから、常に励ましの言葉をかけるようにしています」。

中国人留学生に対して、自分自身の経験も踏まえて、将来への不安や進路の悩みなどについて相談に乗ったり、アドバイスをしたりすることもある。役立っているのは、授業にWechat(中国人の間で広く使われているSNS。LINEのようなもの)だ。参加している学生が作ったグループに加わり、日常的に連絡を取り合っている。読ませたい論文を見つけると

添付するほか、学生の側から学習に有用な情報がシェアされることもある。

さらに、直接授業とは関係ない会話が交わされることもあれば、教員側から学生個人宛に発表の進捗状況などを尋ねるメッセージを送ることもある。こうした普段からの教室外でのやりとりも、授業中の話しやすい雰囲気づくりに役立っているようだ。

「母語ではない言語で話す時に、学生は緊張しがちと思われるので、できるだけ気軽に話したり質問したりできるような雰囲気をつくりたいと考えています」。

今後は、日本語を母語とする学生も増やしたいと考えている。中国語母語話者ばかりでは客観的な議論ができないことを恐れるからだ。現状はガイダンスを聞きに来る日本人学生がいても、中国語能力に自信がなく敬遠してしまうケースもあるという。

「発表をひとりではなくペアで行うなど、学生同士でフォローし合えるような仕組みを作りたいと考えています」。